



同じ方向へ

一步先のあなたへ

永田 和宏



13 大学に親が望むべきこと

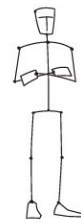
大学にはいま、質の保証が厳しく求められている。

「3つのポリシー」と言われるものがある。学位授与の方針(ディプロマポリシー)、教育課程編成・実施の方針(カリキュラムポリシー)、そして入学者受け入れの方針(アドミッションポリシー)の3つである。どれも一般にはわかりにくい英語であるのが癪だが、ともあれ、この3つのポリシーを各大学で、さらに各学部単位で明確に設定して、報告・公開することが義務づけられている。いいことじゃないか、と思うだろうか。

一見、当然のことのように思われるし、反対する余地はないようにも思われる。大学は学生から授業料をいただいているのであるから、質の保証された教

育を行うのが学生や親への、そして、税金もつき込んでいるのであるから、企業や社会への、当然の義務ではないか、と。

一見もっともらしいことがいちはん胡散臭いのは世の常。これはまことにわかりやすい資本主義の論理だが、そのような最低限の保証によって大学を縛ることこそ、大学に期待すべきもつとも大切なものを、自ら放棄することになることに、もう少し注意が払われていい。



文部科学省は「3つのポリシー」を課し、定期的に自主的に中間評価をすることまで義務づけている。文科省が「大学の質保証に関する取組」を強化したのは、新聞社の世論調査によって、「日本の大学が、世界に通用する人材や企業、社会が求める人材を育てているか」との質問に6割を越える国民が否定的な回答をしたからだという。「世界に通用する人材」という部分はともあれ、さりげなく挟まれている「企業、社会が求める人材」には首をかしげざるを得ない。大学の役割は企業への要請に見あった学生を送り出すことにあるのか。断じてノーである。これでは、最低限ここまで教育しましたから、安心してお使いくださいとでも言っているようではないか。そんなバカな。

大学のやるべきことは、そんな最低ラインの保証ではないはずだ。大学は本来何かの保証などを提供する場ではないし、あってはならないのだ。可能性を開く場所。学生一人一人に、これまでも自分でも気づかなかつた可能性に気づかせるための場なのであ

る。一律にここまで勉強したから、学位を貰ってハイ卒業というのでは困るのである。

学生たちを見ていてつくづく思うのは、彼らはこれまで一律に同じ教育を受けてきたことにより、自分のうちにある可能性にほとんど気づいていない、あるいはそんなものを端からとっくに諦めてしまっているという実態である。それを見ているのは寂しく悔しいことである。

一律であるというものはへらへらあるとどうでもよい。学生らしく、子供らしく、優等生らしく、そんなへらへらに縛られて、それからはみ出た部分には自ら目をつぶってきた。あるいは自分で削ってきた。本来は、そんなはみ出たところにこそ、それぞれの個性の輝きがあるはずなのに。



へらへらあれという教育は初等中等教育においては、ある程度仕方ないことであつた。しかし、大学に入ってからもう少しある必要はまったくないのだ。それに気づいて欲しいが、大学が質保証を徹底するという姿勢は、そんなはみ出た部分の発見に力を注ぐという意欲を削ぐことにならざるを得ない。

企業が大学に質の保証を求めるのは、止むを得ないとして目をつぶってもいい。しかし、親までが大学に質保証を求めるとしたら、それは自分たちの子の可能性を自ら過小評価することに他ならない。親が大学に望むべきことは、とにかく一律の教育、一律の評価軸でわが子を判断しないでほしいということであるはずだ。

質の保証が厳しく求められている
そんな一律な教育でいいはずない
本来は学生の可能性を開く場所だ

京都産業大教授(細胞生物学)、歌人

※コラムへの感想をメールでお寄せください。minna@mb.kyoto-np.co.jp